



日本科学者会議 (JSA) 滋賀支部
NEWS LETTER

2021年5月8日発行 第67号
事務局長 水原 渉
TEL/FAX 0749-47-5169 (共通)
go-ma-me@hi3.enjoy.ne.jp

【論考】 コロナ禍における滋賀県立大学の対応を振り返る

滋賀県立大学 杉浦由香里

新型コロナウイルス感染症の世界的流行から一年が経とうとしています。いまだ収束の可能性が見出せない状況に辟易する日々を過ごしています。とりわけ、日本では、この新しい感染症に対する政府対応が後手後手で、感染症対策は自治体任せ、個人任せの厳しい状況に置かれていると感じています。自治体の首長の姿勢如何によって、感染症対策の方針に差が生じるなど、社会的格差の広がりも深刻です。こうした危機的状況が継続しているにもかかわらず、依然として楽観的観測のもと東京五輪開催を目指す政府に暗澹たる気持ちです。

さて、滋賀県立大学では、新型コロナウイルス感染症の世界的流行を受け、2020年2月に危機対策本部員会議を立ち上げ、対応してきました。しかし、昨年度は、前期授業を遠隔授業へと移行させる決断が遅れ、学期開始を延期することとなり、5月11日から遠隔授業による開講となりました。学年暦の変更は行われなかったため、15回分の授業のうち3回分の授業は課題によって補うよう指示されました。

また、遠隔授業を実施するにあたっては、「原則、ライブ授業は行わない」こと、「教材を通じて学生に自習させる」という発想に転換すること、「最低限スマホで受講できる」ものを前提とすることという方針が打ち出されました。滋賀県立大学においては、Moodleのような学習管理システムやZoomのようなビデオ会議システムの導入は図られず、かろうじて存在していたのが、Office 365の包括ライセンス契約です。

ところが、驚くべきことに、学習管理システムとして利用できるMicrosoft Teamsの使用に制限が設けられ、遠隔授業実施にあたっては、OneDriveと貧弱な教務システムに限定するような利用方法が示されました。他大学においては、Teamsを活用した遠隔授業が

展開されるなかで、本学においてはTeamsの使用方法ははじめ遠隔授業に活用できるOffice 365のアプリの用途については、個々の教員の裁量に放任され、大学による遠隔授業実施のための支援体制は全く構築されませんでした。

後期に入り、教員や組合による強い批判と要望を受けて、滋賀県立大学でもTeamsが全学的に解禁されました。しかし、使用方法に対する研修は、一部教員有志が実施した研修会のみでした。他大学では、遠隔授業のための研修が実施されたり、遠隔授業の支援ガイドが作成されていたりすると比較すると、本学の対応はあまりにお粗末です。例えば、横浜市立大学では、大学のサイトに学生向け教員向けのTeams使用方法が丁寧にまとめられ、初学者でも修学に必要なアプリの操作を習得できるようになっています。後期授業においてTeamsを活用する際は、恥ずかしながら、学生らに上記大学のサイトを参照するように指示しました。

こうした貧弱な学修環境に対して、学生から批判が出るのは当然で、本学学生有志が学費の減額や学修環境整備を求めて署名活動を開始しました。学生たちには本当に心苦しい思いを強いることになりましたが、一部、その成果が実ったことが不幸中の幸いです。学生たちの働きによって、9月には滋賀県議会において「公立大学法人振興費」として「新型コロナウイルス対策環境整備等補助金」約二億六千万円が計上されたことに加え、10月には学生有志の請願が全会派の賛同を得て滋賀県議会本会議で採択されました。陰ながら見守っていた教員にとって本当に心から嬉しいニュースでした。

とはいえ、学生の請願が、実際の大学運営のあり方を変えたかということ、そうともいえず、教員として不甲斐なさを感じています。現在の本学執行部の大学運営のあり方は、政府のそれを彷彿とさせるもので、大学の自治や民主主義は危機に瀕しているといっても過言ではありません。こうした状況をいかに押し返し、民主的な大学運営を取り戻すのが改めて問われて

います。

新しい年度になり、少しずつ遠隔授業のための体制が整えられつつありますが、近隣府県の緊急事態宣言を受けてもなお未だ対面授業の続行が基本路線となっている本学の姿勢に教員としてどのように向き合うべきか、心苦しい日々が続いています。コロナ禍の中で、心が折れそうな時代を生きていますが、良識を捨てずにささやかながらでも社会的連帯を紡いでいけたらと思っています。

【近況報告】私の研究の締めくくり

個人会員分会 小島彬

「日本の科学者」の編集委員長の勧めで2019年11月号の「レビュー」欄に私の研究を紹介しました。支部のアンケートで鉱物学等が専門のNさんが、「小島さんの寄稿は説得力があり普及にも使えると思っています」と書かれ、如何に説得的な記述をするかに腐心したことまで理解して頂いて大変嬉しくなりました。そのレビューに関係する話ですが、世界的な名著で大学の理工系学科で広く教科書として使われているCharles Kittelの「固体物理学入門」の、強誘電体の章でのひな型の物質の構造モデルが妥当でなく、我々が求めた結果が正しいことを著者が私への返事で述べていたことを明らかにする小論文を、私の研究の締めくくりとして出したいと強く思っていました。しかし既に投稿済みの研究内容を含む手紙のやり取りを述べた「解説」を受け付ける専門の論文誌はありません。そこで30年ぐらい前から我々の研究レベルの高さを認めてくれ、論文投稿時にトラブルの際に常に私に助け船を出してくれるドイツのMax Planck研究所の著名な理論家Annette Bussmann-Holder博士に相談したら、彼女が編集委員で無料で読めるオンライン論文誌Condensed Matter でよければ投稿したらと助言してくれたので、'Kittel's Brief Comments Endorsing an Alternative View on Barium Titanate' のタイトルで投稿し2月に掲載されました。論文を読んだ人数が分かり、既に387を数えていて関心の高さが伺えます。若いKittelは当時大物のMegaw女史のX線測定による結論に疑念を抱きながらも、初版本に「考えられている」としてそれを載せ理論展開までしました。彼はそ

の後改訂して現在の第8版まで「考えられている」という記述を無くし説明図を描いていて、正しいデータだと錯覚させます。その誤ったモデルからは双晶構造が必然となり、その視点で研究者が実験・考察を行なってきたため、1940年代以降強誘電体研究の実質的な進展はないと言え、実際第8版まで内容の改訂はありません。私の「解説」ではKittelが描いたモデルに代わるモデルを我々が提示し、彼が私への私信でそれに確信が持てできれば改訂したいと述べていたことを、2年前にKittelが102歳で没したので公開し、同時に我々が相転移測定でえた結果が突破口となり研究が進展するように、それも書き加えています。なお驚いたことに1953年の初版本が滋賀大図書館にあり取り寄せて調べました。近年経費削減で教員人数や図書購入費を削減していますが、古典的な著書の調査活動も不可能になります。今出版社に対応を求めています。

【報告】JSA 滋賀支部第56期第5回幹事会

事務局長 水原 渉

開催日時：2021年4月17日（土）9:30～12:00

（Web 会議）

議事：

1. 2021年度支部大会開催について

今年の全国定期大会が2021年5月30日と6月13日に開催予定となり、それに向けての支部大会開催についての審議が行われ、以下のように決定した

○日時は5月23日（日）（14時～16時頃）

○今回もWeb・集合の併用方式で行う

○それ用の設備の関係で、前回同様に会場は大学サテライト・プラザ彦根（A教室）。

2. 新規会員の承認

今回は3名の新規会員承認が行われた（1名は会議後のML<メーリングリスト>による臨時幹事会において）。全員が個人会員分会所属であった（本来、大学分会が科学者会議の主力となるべきことを考えると、それに相応しい力を築き役割を果たして欲しい）。

3. 次回幹事会

大会まではML幹事会で審議。初回幹事会は大会中に開催。大会直後の幹事会日程などは、新幹事で決定。